2022年7月3日 川越教会

丸山　勉

前もっての「福音」

［エフェソの信徒への手紙1章3節～14節]

わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

[１]　「国」と「時代」をこえているキリスト教信仰

キリスト教信仰というのは「国」を超えているということは、多くの方は確かにそうだなぁと思われると思います。所謂「キリスト教国」と言われない国々でもクリスチャンである者たちはいます。第一、私たちもそうだということが出来るわけで、事実国境を超えています。ただ、国境ではなく、「時代」はどうでしょうか？「それはやっぱり教会が出来てからでしょう」と思う方は多いと思います。つまり、イエス・キリスト以前には「キリスト教」はないということですね。確かに所謂宗教としてのキリスト教は存在していません。そうしますと私たち疑問を持たないでしょうか。キリスト生誕以前の人々はどうなるのか。キリストの恵みに与っていないということは、皆滅ぼされてしまうのか、しまったのか、と。

しかし、私たちはそのような問いに対してこのように言うことが出来ると思います。「神様は人間を愛しています。その独り子であるイエスを十字架におかけになるほど、人間に対する憐みは大きいお方です。それは二千年前に、時至って神様は独り子を犠牲にされましたけれども、その神様というお方は、もともと国も超えているし、時代も超えている方です。ご自分のかたちに似せて人間を造られた神様のご愛は、天地創造の時から、この世界が終わりを迎えるまで決して変わることがない。私たちはこの神様に人生を委ねて間違いはない」と。これは、私自身の信仰の思いも入っています。その意味では私の信仰告白です。けれども、根拠がないことを言っている訳ではありません。その根拠の一つが、今日読んで頂いた「エフェソの信徒への手紙」の1章3節以下の言葉にあると思っています。これは使徒パウロによる素晴らしい言葉だと思います。1章3節から14節、これは原文（ギリシア語）では、ひと綴りの文章だと言われています。「。」がなくて、ずっと続いている一文です。パウロは書いて止まらなくなってしまったのかもしれません。書き始めたら、次々と数珠つなぎのように言葉が生み出されてきたような。ですから少々くどく感じる部分もありますが、それだけパウロの思いが溢れている言葉だと思います。

［２］ 「主イエス・キリスト」によって

そして、ここで私が印象的だと思ったのは、「天地創造の前に神はわたしたちを愛して」（4節）とか「イエス・キリストによって神の子としようと、御心のままに前もってお定めになった」（5節）とか「前もって定められ、約束されたものの相続者とされました」（11節）と書かれていることです。これは人間には誰も証明できない神様の古からの御計画のことです。「天地創造の前」 或いは「前もって」。私たちのちっぽけな頭を超えた神様の秘儀です。それをパウロは、神様に聞いたかのように言い切っています。「妄言」だと思うでしょうか？そのように思う方もいるでしょう。けれど、私はたとえ妄言でも、これを信じます。そしてそれに生涯を賭けます。私が今牧師であるということは、これに「アーメン」と言っているからです。

　この3節以下の言葉の中でパウロは何度「主イエス・キリスト」とか「キリスト」或いは「御子」という言葉を使っていることでしょうか。これがキーワードですが、10回を軽く超えています。しかし元々彼はキリストという言葉ほど聞きたくない言葉はありませんでした。彼はクリスチャンたちを撲滅しようとしていたその首謀者の一人だったのですから。しかし、彼はある時分かった。いや、分からされたのです。自分が信じていた神は、自分のイメージや、他者をも容赦なく裁く自己正当化を促す存在、自分を鼻高々にさせるそういう偶像であり、それは他人だけではない、実は自分自身の人生も壊していく生き方に繋がっていたということを。それを知らせたのは誰でしょうか。観念の神ではなく、思想上の神でもなく、生きておられる神です！天からの光、キリストの光に、ある時彼は捕らえられたのです。3節からの言葉をもう一度見てみましょう。パウロは、神を讃美する人生に変えられている自分を見つめながら語っていると思います。

‟わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して…”そして“イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになった”とあります。

神様がもともと私たち人間に与えようとされていることはこれだったのだ！と、パウロは主イエス様のことが分かれば分かるほど、自分に与えられている、いや、すべての人間に与えられる神様の恵みの大きさが見えてきたのです。それは、この世界の初めは神によるものなのだから、私の初めも神によるのだ！そしてそれは、人間に対するあらゆる霊的な祝福であり、人間への「愛」なのだ、私たちは悪魔の子ではなく、「神の子」なのだ。それをイエス・キリストがあの十字架で明らかにして下さったのだと言っているのですね。7節。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです」。10節には「こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され」とあります。主の十字架と復活のことです。神様が、時満ちてイエスとなって、私たち全ての人間のために犠牲を払われた、その愚かしい程の神様の犠牲のことを、パウロは「救いの業の完成」と言っているのです。そうでなければ、罪人である私たちは神様のもとに帰ることが出来ないです。

［３］ 「前もって」の「最上の持てなし」を

私はあの「放蕩息子の譬え」を思い起こしました。（ルカ15章）。あの譬え話は、改めて読んでみて思ったのですが、破壊しているような家族ですよね。雇人も多くいる恵まれた家で、二人の息子がいたけれども、弟息子は父親から金を受け取ると町へと走り、遊び呆けた末財産をなくし、生きるエネルギーも枯渇して死ぬ寸前に田舎の父の所に帰って来ました。この兄もいたのですけれども、兄が弟のことで心痛めたとは書いていません。むしろ父親が弟の帰還を抱きとめ、喜び迎えたことが面白くない。つまりこの兄と弟は通じ合っていないのです。

この家族の中でずっと一番苦しんでいたのは、他ならぬこの父親ではないでしょうか。何故か母親の存在は出て来ていませんけれども、まあそういう譬え話ですし、当時だって片親の家族は沢山あったでしょう。本当にこの父親は、難しい二人を抱えて大変だったと思います。ただこのお父さんは、「いつまでも待つ」お父さんでしたね。これは凄いです！小言一つ言わない。「自己責任だ」「お前が蒔いた種だ」なんて言わない。これがどんなに大きな愛であることでしょうか！赦しであることでしょうか！この息子が帰って来ると、最上のもてなしを致します。立派な衣装にご馳走に、音楽まで奏でて。私はこれだ！と思いました。「神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。」そしてパウロは何度も「前もって」、「前もって」と言っています。いつ帰って来ても大丈夫なように用意している…私たちだって、誰かに喜んでもらいたい時は、「前もって」プレゼントを買ったり、ご馳走を用意するでしょう。天のお父様は私たちのために「前もって」キリストの十字架というあり得ないプレゼントを用意して下さったのです。そして、この息子に指輪をはめたように、私たちが「神の国の世継ぎ」であることを聖霊の証印を押すことで明らかにして下さったのです！この弟の兄は文句を言っていますね。でもこの兄に対しても父は「わたしのものは全部お前のものだよ」と言っています。兄もまた父の愛を見失っていじけていたのです。私たちは、何と近くにいる神様の愛に鈍感なのでしょうか！そして自分勝手に彷徨い、人生を台無しにしようとしてしまう。これこそ罪です。そうではなくて、「わたしの愛の内におれ！何度でも立ち帰ってくれば良い！」と、この愚かしい程の愛の持ち主は、十字架の上から待ち続けながら、今も招いて下さっているのですね。この十字架の下で、父と子も、また兄と弟も一緒に生きられるようになるのではないでしょうか。…今、この父の家には、喜びの音楽が響いていますね。教会にも讃美が欠かせないように。それは「天地創造」の時から、私たちを招き続けている天上の音楽です。お祈り致します。

主イエス・キリストの父なる神様、今日の礼拝の朝を感謝致します。私たちの存在は、偶然の産物ではありません。あなたが天地創造の初めから、私たちの理解を超えた、大きな御計画の中に与えて下さった命です。あなたに愛されているから今私の命があるのです。病気も、罪も、悲しみも全部知って下さって、「神の子」として、私たちを本当に愛して下さっています。どうかその愛を振り払うことがありませんように。そして、あなたの愛が見えなくなる時にはいつも、十字架の上から招いてくれるイエス様を思い起こすことが出来ますように。どうかこの厳しい夏の間も私たちをお守りください。この世界が、あなたの平和の中に安心して生きることが出来るよう、私たちは祈り、あなたにお従いして行くことが出来ますように。イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。